学　位　論　文　要　旨

学位論文題目　　秦漢時代「朝」空間研究

申請者氏名　　聶　寧

「朝」は、朝政を行う空間である。秦漢時代の「朝」空間は帝国の誕生に伴って新たに構築された国家核心空間であり、前例のない空間である。さらに、秦漢時代は徐々に中国古代帝国「朝」空間の建設様式を形成した時代である。秦漢以降の帝国の「朝」空間は、秦漢時代に形成された建設様式に基づいて構築された。そのため、秦漢時代「朝」空間という課題は、中国の「朝」の変遷研究の不可欠な一環であり、究明する必要がある。しかし、この課題に関する専論はなかった。したがって、本論では、秦漢時代の「朝」空間を研究する対象に限定し、「朝」空間構成の変遷と特徴・「朝位」空間の特徴を明らかにする。

本論は史料（文献資料を主として出土文字・考古資料も共に参照として）に基づき、論を進める。

第一章は、上古三代の「朝」空間の沿革から検討をはじめ、秦代以前の上古三代および東周秦国の「朝」空間の構成・特徴を明らかにした上で、秦帝国の「朝」空間の構築背景を究明し、中国最初の帝国である秦帝国の「朝」空間の建設プランを検討するものである。

君主が政務をとる場所である「朝」空間は、堯舜時代の「廟」を中心とする状態から、夏殷時代の「廟」・「寝」並立を経て、周代に至って「寝」を中心とする状態へと変化した。東周秦国の「朝」空間はすでに「五門」・「三朝」の特徴をもっていた。その中で、君主の所在を表明する「帷幄」を設置する陛上の「殿」、「東西両階」で設ける「陛」（天子階）、陛下の「廷」、および「尊卑を別」し「教令を列」する「冀闕」は全て東周秦国の「朝」空間を構成する不可欠な要件となった。秦帝国の新都城の営造プランには、渭水北側の咸陽宮と渭水南側の極廟・阿房宮が、新たな「朝」空間における「三朝」を形成し、秦帝国「朝」空間の中核部分を構成して、帝国の「朝」空間が南を向く基本的方向性を確立した。秦帝国の「朝」空間の建設様式は漢帝国の「朝」空間の構築にも影響を与えた。

第二章は、前漢の「朝」空間の構成と特徴を究明するものである。

本章では、「朝」空間の殿・陛・廷・門・闕・垣などの空間要素を検討し、前漢「朝」空間の上下・内外構成と特徴を明らかにする。前漢「朝」空間の中心部は、「大朝会」中枢の前殿と、「常朝」中枢の宣室からなり、「殿」の下に「左城右平」・「重軒三階」の「陛」を設けた。「陛」（天子階）は秦帝国の「両正階」建設様式を採用し、正階に「東西両階」を設け、そのうえに、左中右の殿廷として「除」・「堂塗」を設け、内外三重の廷として殿垣（「朝」内垣）と宮垣（「朝」外垣）を構築した。このような三重構成をとることが前漢

「朝」空間の特徴である。

第三章は、殿・門・闕・垣から、後漢の南宮の光武帝「朝」空間、北宮の正式的な皇帝「朝」空間、南宮の太后「朝」空間の構成と特徴を明らかにするものである。

後漢洛陽において、帝国「大朝会」を行い、且つ皇帝が親ら国政を執る空間である皇帝「朝」空間があり、また、太后が少帝の代わりに国政を執る空間である太后「朝」空間もあった。光武帝時期に、南宮に一時的に皇帝「朝」空間を設置したが、明帝以後、正式的な皇帝「朝」空間が北宮に設置されることは固定化した。正式的な皇帝「朝」空間が北宮に設置された際、後漢の南宮は「離宮」になり、北宮は「正宮」になった。南宮の光武帝「朝」・太后「朝」空間が、前漢「朝」空間の建設様式を採用し、北宮の正式的な皇帝「朝」空間は周礼を参照し築いたのである。この正式的な皇帝「朝」空間の建設様式は、後漢以後の帝国「朝」空間に受け継がれていくのである。

第四章は、皇帝の朝位を重点に置いた上に、秦漢時代の「朝」空間における（皇帝・皇太子・臨朝皇太后・官吏らの）朝位を明らかにするものである。

「朝」空間における朝位の位置関係は上下・南北・東西・居中・内外がある。上下の位置関係は、立体的な「朝」空間にある上・中・下層の区画を表現し、南北・東西・居中・内外の位置関係は、平面的な「朝」空間にある区画を表している。立体的な「朝」空間において、上層「朝位」空間にあるのは皇帝位である。これは皇帝が臣下の上に「君臨」していることを可視化しているのである。「朝」空間において、皇帝が絶対的に上位にいることを表現している。君主が「南面」し、臣下が「北面」するという君臣間に見られる朝位の差異は、その身分の差を表現している。「南面」する皇帝位は親政している皇帝専用の朝位である。太后臨朝期の太后位は西にあり、少帝位は東にある。太后が尊敬される身分を表現し、少帝の「朝」の主人身分を反映している。且つまた、文官と武官の朝位が明確に区分され、前者が東に、後者が西に配置されている。「朝位」空間の全体を検討すると、諸朝位の中には「居中」位が存在していることがわかる。この「居中」区画には、帝国の君主位・帝国の准君主位・君主に拝謁する位がある。ここで注目したいのは、この「居中」区画に設置される「朝位」は全て帝国の君主に関連している位のことである。「朝位」の内外関係は、人々が皇帝との親近程度を表明し、帝国にとっての重要性を表現している。また、「朝」空間内における固定化された皇帝と百官等の朝位により、非「朝」空間において、朝位を定める役割を果たしたことも検討する。

終章は、「朝」空間の変遷と特徴を論ずるものである。第一章・第二章・第三章の検討に基づき、秦代以前・秦・前漢・後漢の「朝」空間構成の変遷を究明することを通して、「朝」空間の沿革を分析する。そのうえに、秦漢時代の「朝」空間の諸要素と特徴を探究し、秦漢帝国においてどのような空間は「朝」と称されるか、という問に答えることを試みる。最後に、本論での検討に基づき、将来の研究課題を提起する。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 127 号	氏　名	聶　寧
論文題目	秦漢時代「朝」空間研究		

（論文審査概要）

本学位論文は、日中両国の都城史学界において近年重視されてきている都城空間という概念を活かし、秦漢時代「朝」空間の形態・変遷及びその特徴を研究したものである。その内容についての観点別評価は以下の通りである。

１．創造性

本論文は、従来の説を十分に理解したうえで、秦漢帝国の「朝」「廷」「陛下」「陛上」「宮殿」「門闕」「垣」「朝位」などの「朝」空間の諸要素について、それぞれ個別に考証をしたうえで、各時代における「朝」空間の形態とその特徴について綿密な検討を加え、新しい論点を提出している。また、その導き出された結論は、儀礼や政治制度などを分析する先行研究によっては究明されてこなかった空白部分を補完するものとなっており、加えて、関連する皇帝制・天皇制・宮城制などの隣接する研究分野への貢献が明確であり、創造性があるものと判断する。

２．論理性

本論文は、序章から終章までの全六章で構成され、秦漢帝国「朝」空間の形態・変遷・特徴を明らかにすることを目的とする。その結果、秦漢時代「朝」空間は上古三代秦の草創期・前漢の形成期・後漢の変容期という三つの段階を経て変遷し、「朝位」空間の配置や各形態の時代的な特徴が定着化したという結論に至っており、また、１章の「起」、２・３章の「承」、４章の「転」と終章の「結」という一貫性のある論理の展開によって結論が導かれているため、論理性があると判断する。

３．厳格性

本論文は、先行研究が殆んどない領域を課題としているが、間接的な先行研究論文を活用しながら、文献史料を網羅的に渉猟している。それに加え、考古資料を補助的に使用する「二重証拠法」によって、秦漢時代の「朝」空間の形態・変遷及びその特徴を究明し得ており、先行研究・証拠史料、及び分析方法が厳格に用いられているので、本研究の立証は厳格性があると判断する。

４．発展性

本論文の将来的な展望については少なくとも二点を挙げることができよう。１つは、古代中国の朝廷と密接に関連する皇后の「臨朝」空間に関する研究。２つめは、古代中国の朝空間が朝鮮半島・日本列島・中南半島などの王政・帝政を敷いていた東アジア地域全体に及ぼした影響に関する研究。これらの研究へと発展することが期待できる。それゆえに、本研究は発展性があると判断する。

本論文は以上の諸観点により、（全体として）優れていると判断される。

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）馬 彰

（氏 名）高 木 智 見

（氏 名）森野 正弘

（氏 名）　　㊞

（氏 名）　　㊞